

ねん がつ にち
2023年4月16日

ふっかつせつだい しゅじつ
復活節第2主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」と福音に記されています。わたしたちはこの3年間、同じように、恐れの中で閉じこもっていました。

その日、弟子たちに向けて語りかけられたように、主ご自身がいまもまた、「あなた方に平和があるように」と語りかけてくださっていると、信じています。神の平和、すなわち神の支配の中にわたしたちは生かされていることを心に留めたいと思います。

復活節第二主日は、教皇ヨハネ・パウロ二世によって、「神のいつくしみの主日」と定められました。聖ファウステイナが受けた主イエスのいつくしみのメッセージに基づいて、神のいつくしみに身をゆだね、互いに分かちあう大切さを黙想する日であります。

よく知られていますが、2005年4月2日に帰天された教皇は、その翌日の神のいつくしみの主日のためにメッセージを用意されていました。そこには、こう記されています。

「人類は、時には悪と利己主義と恐れの方に負けて、それに支配されているかのように見えます。この人類に対して、復活した主は、ご自身の愛を賜物として与えてくださいます。それは、ゆるし、和解させ、また希望するために魂を開いてくれる愛です。」

神のいつくしみは、教皇ヨハネ・パウロ二世にとって重要なテーマの一つでした。1980年に発表された回勅「いつくしみ深い神」には、「愛が自らを表す様態とか領域とが、聖書の言葉では『あわれみ・いつくしみ』と呼ばれています。・・・いつくしみは愛になくってはならない広がりの中にあつて、いわば愛の別名です」(いつくしみ深い神3 / 7)と記されています。

神のいつくしみ・あわれみを目に見える形とするのは、愛の具体的な実践です。

同時に 教皇は、「人間は神のいつくしみを受け取り経験するだけでなく、他の人に向かって、いつくしみをもつように命じられている」としてします(いつくしみ深い神 14)。神のいつくしみは一方通行ではありません。それをいただいたわたしたちは、互いに神のいつくしみ・あわれみ、すなわち愛を分かち合うものでなくてはなりません。

東京ドームでの教皇フランシスコの言葉を思い起こします。

「傷をいやし、和解とゆるしの道をつねに差し出す準備のある、野戦病院となることです。キリスト者にとって、個々の人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準です」

神のいつくしみを、あわれみを、愛を、具体的に生きる教会でありましょう。